



逃 会 社 亡

鶴井通眞

Tsurui Michimasa

講談



著者 鶴井通眞 1939年、大阪市生まれ。65年東北大学理学部卒業後、都市銀行、業界誌記者、塾講師、損害調査員などを経て現在、著述業。著書は『算数わくわく大作戦』(朝日新聞社、アサヒジュニアブックス)『人はなぜ探偵になるのか』(朝日文庫)、『失踪』(朝日新聞社)など。

かいしやとうほう
会社逃亡

つる い みら まさ
鶴井通眞

© Tsurui Michimasa 1991

1991年9月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3509

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

(庫)

ISBN4-06-184988-3



講談社文庫

会社逃亡

霧井通眞

講談社

会社逃亡
目次

序	章	時計の中の鬼	9
第一章	就職		21
第二章	サポータージュ		27
第三章	退職		35
第四章	家事		49
第五章	家		69
第六章	キリギリス・ミーツ・キリギリス		83
第七章	取材Ⅰ 企業と警察署と		105
第八章	取材Ⅱ 第三街区で		119

第九章 取材Ⅲ 会見 159

第十章 取材Ⅳ 三木透のお母さんに 201

第十一章 ある幻の求人広告 233

第十二章 水に棲む猫 247

第十三章 列の内と外 265

終章 時計の中の鬼 289

文庫版あとがき 303

解説——佐高信 308

会社逃亡

序章
時計の中の鬼

ここに一つの腕時計がある。十五年前の春、就職祝いに父が買ってきてくれた時計だ。当時、郵便局の課長だった父が、局に出入りする業者に特別に一つ一万円に値引きしてもらったといって、私と、私が大学で道草を食っている間に私に追いつき同時に就職した弟とに、一つずつプレゼントしてくれた時計だ。キング・セイコー。その頃にはすでに、自動巻きや、日付入りの腕時計が出まわっていたが、古めかしい型の好きな私が、文字盤のオーソドックスな時計、日付入りでない時計、竜頭りゅうづつがついていて、一日一回ねじをまかねばならぬ時計と注文をつけた結果、父が選り出してくれたのが、このキング・セイコーだった。

文字盤の下部に“KING SEIKO DASHOCK 25 JEWELS”と黒い文字が記されている。裏側
の中心にはめこまれた一円硬貨大の銅板に、西欧の家紋のようなマークが彫りこまれ、彫りの鬩
には緑青が生えている。この時計を、私は十五年間、持ち永らえてきた。

父は忘れたかもしれないが、この時計をくれるとき父は、私と弟とに、

「早よえろなつて、こんな時計やったら、かつこ悪いようになってくれ。今度めからは自分の甲斐性でなんぼでもええ時計、買えるんやさかいに」

と申しわたした。父は得意そうだった。少しも淋しそうには見えなかつた。子どもが自分よりもえらくなつて、自分のなけなしの就職祝いをきれいさっぱりと棄ててくれる日を心待ちにしているようだった。

このときからほぼ七、八年後に弟はオメガの時計に持ち替え、それからさらにいくつか持ち替えて、今は確か三つ目か四つ目の時計のはずだ。弟は父の期待に応えた。しかし私は、今もこの時計を愛用している。幼いときから概してもの持ちのよい私の氣質がわざわざいしたのだ。

私にもこの時計を棄てるチャンスが幾度かあったかもしれない。しかし、私はその度に時計を棄てずに、かわりに職場をいくつか棄ててきた。そして今日、腕時計はあいも変わらずここにあるが、四十歳に達した私は職を持っていない。就職祝いの腕時計、私はどうやら父から時計だけを受けとつて、子どもの就職をよろこぶ父の心は受けとりそこねたよつだ。

この時計はなぜ、今もここにがあるのか。私は五歳の秋に祖母に聴かせてもらった話を思い出

す。五歳の秋といえ、戦時中の一九四四年、父が応召されて戦地に赴いたあと、B29の空襲が末期的症状を呈する少し前、私も祖母も大阪の街にいた。その日頃、母が父に替わって働きに出た留守宅で、私は針仕事の祖母の脇で一日、本を読んですごしていた。ある日、「小さいときから本好きだった」私に、祖母は一冊の本をプレゼントしてくれた。ざらついた黄ばんだ紙に活字ばかりが印刷された、ぶあつい本だった。その本を買ってもらった帰りみち、私は家の近所で一群の蟻を見つけた。行列する蟻に見入る私に、祖母は語った。

「お前、人間の心の中には蟻みたいな、小さい鬼がいっぱい住んどつてな。蟻みたいにも一所懸命、働いとるんや。ウン、いっぱいおつてな。お前が、腹すかしたら、腹すかしたからごはん食べとうなる鬼もおるしな、お前が誰かにたたかれたりしたときは、たたかれたから痛いいうて泣いてくれる鬼やとか、いっぱいおるんや。そいでな、お前の持ちもんにはなんにでも、お前の心から一匹ずつ鬼が住みついて、お前の大事なもんをいつでも守ってくれるんやで。今日、買った本かてそうやで、それはもうお前の本やから、もうお前の心の鬼が一匹、その本に住みついてとるんや。お前が心変わりせんと、その本、大事に思うとる間はな、お前の鬼がその本、大事に守ってくれるんやから、お前、いつまでも、その本、大事に思うとらな、あかんえ」

祖母の語り口の生々しさにひきこまれて、私は本のページを繰って鬼を探し出そうとして、祖母に笑われたのを記憶している。

祖母は、それから二年後、疎開さきの母の実家で、食糧の乏しいさなかに病没した。祖母にプ

レセントされた本は、疎開さきを持って行き、戦後、再度大阪の家に持ち帰ったが、小学校五年生の秋のジェーン台風の浸水にさらわれてしまった。今私に残されているのは、祖母の物語の記憶だけである。

記憶だけを残された私は、心の鬼の物語を一点の疑いもなく信じている。私のキング・セイコーには、私の心の鬼が一匹、住みついていると信じている。どういう鬼なのか、どういう風貌をしているのか、その鬼が一途に働くあまりに私はこの時計を今日まで持ち永らえてきた。その鬼は何をどう考えて働くのか、鬼が望まなばかりに、私はえらくなれないどころか、定職さえも持てずに今日にいたってしまった。

この鬼は、十五年前の私の就職の日に、この時計に住みついた。以来十五年間余、鬼は私が性こりもなく繰り返した就職と退職とに立ちあつてきた。私がついに定職を断念する過程を通じて私によりそつてきた。なぜ私がいたずらに退職を繰り返したのか、なぜついに定職を確保しえなかったのか。私さえも知らない私の秘密を、ことによるとこの鬼だけは知っているかもしれない。しかし、いずれにせよ私の心の鬼は私に似ているにちがいない。とすると、ついに定職にありつけなかった私に似て、この鬼も怠け者だろうか、職場嫌いだろうか。

それにしてもこの鬼は、一面、働き者でもある。十五年間に私はこの時計を二度、ちよつとした修理に出しただけだ。それでいて、この時計は健在だ。その他にも二度、三度と故障したことはあるが、しばらく放置しているといつか自然に修復していた。蟻のように働き者のこの鬼が時

計の中で絶えず「大事に守ってくれた」からにちがいない。職場嫌いのくせに働きの者。それが、時計の中の鬼の正体の一端とすれば、私は一度、現世でこの鬼に会っている。現世に生きて在る鬼に。

文庫版に際して——私が三木透の脱サラ万引事件をテレビで知ったのが今からほぼ十九年前。三度三度の食事の度に一食分、インスタントラーメンを一袋ずつ盗み、水は屋外水道で調達、近所の方に配達される朝刊を大量に抜きとって燃料にあてるといふ、ストイックで几帳面な万引ぶりに、私は一方ならぬ関心をそそれ、さっそくテレビ局に連絡をとって訪ねて行った。

そして、その直後に原稿用紙百枚余りのノートを作成し、関西の月刊誌に発表した。それから九年を経て、ということは今から十年前に私はノートをふくらませる形で三木透のことを『ある企業逃亡者の軌跡』という一冊の本にまとめた。

十九年前、三木透に出あった頃も、十年前の、それを一冊の本にまとめていた頃も、私はぬきさしならないピンチの真ただ中にいた。

十九年前は、高校教師の妻の稼ぎに甘えて、許されるままに次から次へと転職を繰り返す、ついには人間として生きる上で欠くことのできない社会とのかかわりをなし崩しに失ないつつあった。身体を動かさずすればその苦境からも簡単に抜け出せていただろう。

だが、私は理窟を積み木のよりに組み上げて武装しようとしていた。苦しまぎれに悪あがきし、もがけばもがくほど蟻地獄のように底へ底へとひきずりこまれていた。

私にとって三木透は蟻地獄からはい上がる出口だった。

好き勝手放題の末に自ら招いた苦境について不平も不満もいえた義理はないが、私よりもっと深い苦境におちているらしい三木透に代わって、その立場を代弁することなら許されそうだ——自分のいい分を訴えるために、私はそんなまわりくどい方法を講じようとしていた。

自分のことは分からないが、他人のことなら分かりうる——私の魂胆はともかく、三木に出会った私は、見失っていた自分を何とか探りあてて、もう一度社会に戻ることに成功したようだった。

だが、社会とはそんなに甘いものではないということか。それから十年も経たぬうちに私は再度、苦境におちいった。今度は胃にアナをあげ、少し集中して仕事をすればたちまち熱っぽくなる状況が数年間におよび、年収が五十万円足らずの生活が数年続いた。

不幸なことにその頃、妻は教師を辞めていた。家計は私一人の肩にかかっていたが、その私がそのでいたらくだから、家族は深刻な経済的危機に見舞われていた。

「妥協するな、誰にも分からなくたってかまわない」と、追いつめられた私は独り気負っ

て、三木透のことを本にまとめていた。今読み返してみると、やはり分かりづらい。

難解だというよりは、追いつめられた弱味を見せたくないからか、あるいはそういう弱味を正当化しようとするためか、弁解調のくどくどしい理窟が目立っている。それが全体を読みづらくしているようだ。

《時計の中の鬼》のエピソードも、そういう正当化操作のために動員されているようだ。私がなぜ三木透にひかれたのか。三木透の代弁者のふりをして、自分の言い分をのべたてたかったから——とそう書けばすむものを、そこを避けて通り、しかもそれらしいいわれを描こうとしてこういうエピソードをひっぱり出しているようだ。

十年前、この本が出たとき、「自分のことを自分のこととして語らず、他人に託して語っている点がこの本の弱味だ」という書評を見かけた。その当時は軽く反発したくらいで特に何とも思わなかったが、今から思えば指摘された通りだったのが分かる。

となれば、文庫本化にあたっては、そういう余分な装いをとっばらい、本当のことだけを残し、書き加えればよさそうなものだが、事実、何度かそれを試みたが、ことごとく失敗した。

《時計の中の鬼》のエピソードや、第二章の書き出しのカフカの『変身』の引用や、第五章の書き出しの、自分に宛てた手紙の引用などをとり除いた書き換えも二度、三度と試みたが、ついに断念した。理由は二つ。